

# やまぐち自然派宣言

原爆投下されて、六十五年の今

国際生物多様性年と自然共生

リレーミーティングで

地域は変わったか

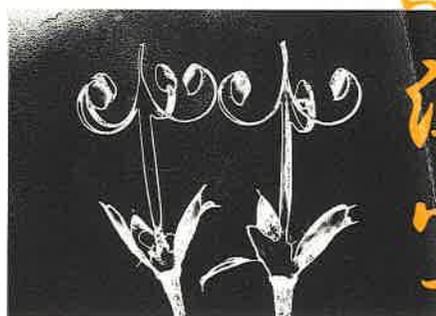
(三) 岩国市錦川流域

自然の楽しみ方

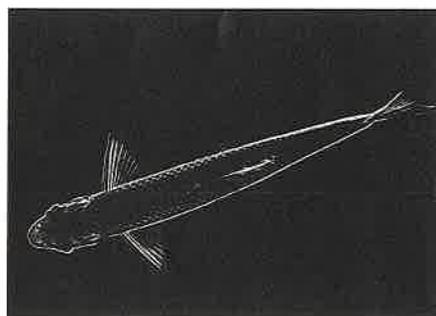
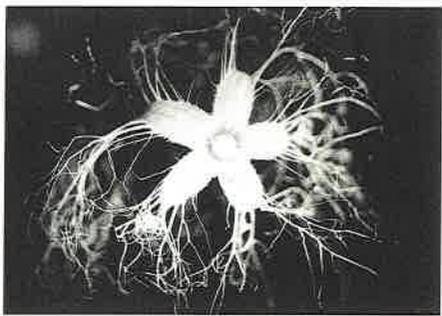
森林インストラクター山口会の

自然の楽しみ方

ネイチャーゲーム  
バードウォッチング  
瓢たん作りについて



## 共生



生態系探訪

再話 新種ツノシマクジラの発見

共生随筆

自然感じる楽しさを広めたい  
2010年。海人受難の夏  
私たち日本人と日本ミツバチ  
(和蜂)の楽しい関係  
すずめと共生について・ツイッター

共存から共生へ③

やまぐち自然共生ネットワーク

平成 22 年 9 月 30 日

## 原爆投下されて、六十五年の今

開村修三

今年度は原爆投下から六十五年目という、小生自身は小学二年生で、母の実家の柳井市伊陸でふと庭先に出たところ、東の空に太陽が又昇ったかのような輝きを目にしました。この後、広島にピカドンが落ちたと、想像を絶するような地獄、地獄の話を、子ども心に、ものすごいことだと、あつてはならぬことが起こってしまったのかと、心に深く、深く刻まれました。水をくれと言ひ、水を口に入れるとそのまま亡くなった人々とか、黒い雨が降ったとか、なんとも異様な話を聞きましました。

伊陸から広島まで直線距離で五十キロメートル位でしょうか。今年みたいに暑い日が続くと、原爆のこと、被爆した人々のことを特に想い出すのです。その後核実験が何千回と実施され、威力たるや、広島、長崎の比ではないものがあるようです。その後、後遺症というようなものも含めて、実験の結果を関係各国は報告せねばならぬと思います。地球に甚大な負荷を及ぼしていると考えられる。生物の絶滅、奇形、生殖能力の未熟など、影響は測り知れないであろう。



角島

昔中国の話に、ツルベで井戸水を汲むのに滑車を用いると便利と言う人に、「機心あるは危し」と言つて警告をした人がいたそうであるが、我々人類の、そうした文明の利器(人間にとつて)に依つて生存が損なわれることが余りにもおびただしいのではなからうか。人類という存在は実になげかわしい。他の生き物にとつては、まさにいてくれない方がいいと受け取られるのではなからうか。他の生き物との共生は自明の理として受け入れ、競争を回避する最善の策を講じねばならぬ。文明の利器等に依る他生物への殺りくの制限など、今まで無関心だったことに、しっかりと



葛ヶ岳クサリ場

協議し、対策を取り合おうではないか。地球は決して人類のためだけの物ではないからである。経済活動にはこうした制限を適用せねばなるまい。我々としては、目の前のことから少しずつ、共生への活動を、連携をしながら展開して行きたいものである。

ところで、この秋開催される全国障害者交流登山大会のことを述べさせてもらいます。今年度は、東京、新潟が主催で、乗鞍岳を中心とした大自然がフィールドです。障害者の方々の目となつて、共に手を取り合つて鳥の鳴き声や動植物に接し、少しでも自然の中を歩く楽しさに触れて欲しいものである。

## 国際生物多様性年と自然共生

中山 淑子

二〇一〇年は、国連が定めた「国際生物多様性年」。生物多様性とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。地球上には、それぞれの環境に適応した三千万種ともいわれる多様な個性を持つ生きものがおり、お互いにつながりあい、支えあって生きている。

私たち人間もその一部だ。それなのに私たちは、自然環境悪化の最大の原因となり、命の土台である生物多様性を自ら壊している。

常に地球上のどこかで起っている紛争、大量の二酸化炭素の排出、天然資源の乱獲、人口増大による食糧問題など、課題は少なくないが、それらを解決していくのは私たち人間の使命であり、持続可能な発展のためには、生物多様性への配慮は不可欠だ。人間は人間だけでは絶対に生きてはいけないのだから。

「自然共生」を考えると、私にとっては、共生ともいきという言葉のほうがしっくりくる。地球に、あるいは宇宙にさまざまな命が存在し、それがつながりをもって全体を構成している。過去から未来へと連綿とつながっていく命のにぎわいこそ生物多様性であり、

ともいきという言葉の意味であると感ずる。地球規模の課題の前で、自分一人の存在はあまりにもちつぽけで無力だ。それでも人間と人間がつながれば、不可能が可能に近づいてくる。「自然共生」への想いや志でつながる仲間やネットワークの大切さもそこにある。

それと同時に、日常の暮らしのなかで、生物多様性を意識して行動を選んでいくセンス（感性）も大切にしていきたい。例えば森の中を歩いたとき、誰もが五感で自然の豊かさや心地よさを感じるだろう。それは、人間のDNAの中に組み込まれた野生の記憶が呼び覚まされているからだと思う。そのセンスこそが、ともいきライフスタイルへの第一歩だ。

どんなに仕事が忙しくても私は、休日には森や川や海、農山漁村にでかけていく。森の整備や森林セラピーを実施したり、川や田んぼで両生類の観察や調査をしたり、子どもたちに宿泊を伴う地球環境教育を行ったり、農山漁村の元気づくりのお手伝いをしたり、都市での自然の入口としての「庭」づくりを模索したり、常に現場主義でともいきを実感しながら生きていきたいと思っている。

つまりは、自然大好きなことです。



地元学手法による蓋井島環境調査



生物多様性EXPO in 福岡への出展

## リレーミーティングで 地域は変わったか

### (三) 岩国市錦川流域

錦川は山口・島根県境のアザミヶ岳に源を發し、南北に大きく蛇行しながら県東部を横断して瀬戸内海へと注いでいます。その流路延長は110kmと、県内随一の長さを誇ります。流域面積は890km<sup>2</sup>で県内最大の河川です。錦川は自然の宝庫で、特に宇佐川の源流、寂地峡付近は、西中国山地国定公園に位置し、豊かな森林が谷を被っています。森の養分を含んだ水は冷たく美しく、川魚や小動物や植物の宝庫となっています。

平成18年第3回リレーミーティングが錦川流域を舞台に、山、川とふれあいながら自然体験活動に参加し、自然保護の大切さを学びました。あれから4年、地域は変わったか、少しずつではありますが、変わっています。錦川流域に住んでいる人にとっては、このすばらしい自然はあたりまえの風景です。ある雑誌の中に、「錦川清流線に乗った。しばらく緑の山々の中を進むと眼下に、清流錦川が見えてきた。氷のように透き通った川の水に思わず声をあげてしまった。車内を見渡すと

乗客の老人が居眠りをしていた。地元の人にとってはあたりまえの風景、なんと贅沢なことでしょう」とありました。リレーミーティングには地元も人も多数参加されました。山口大学名誉教授の山岡先生の基調講演の中で「錦川流域は自然ミュージアム」といったお話がありました。地元の人たちは、自分たちの住んでいる地域がすばらしいところだと認識しました。2日目の羅漢山ハイキングや、寂地峡散策などにも参加し、ガイド付きで説明を受けながら自然のすばらしさを勉強しました。それをきっかけに、徐々に保護活動が芽生えてきました。

寂地山のかたくり、開花のシーズン、ゴールデンウィークには多くの観光客が訪れます。薄紫の可憐な花が咲きますが、山全体で数本、真っ白い花が咲きます。その白い花が毎年のように盗掘されます。観光客から、白い花を見るために来たのに今年も見られなかった、また、山頂付近全体に花が咲いているのにそこにシートを広げて弁当を食べていた、などと苦情が寄せられ、地元の人たちが立ち上がり、観光協会や、地権者である森林管理局の皆さんや、県、市の職員も参加していただき、案内板や、警告板や、登山道に杭を打ちロープを張り、花の中に立ち入れないようにしました。



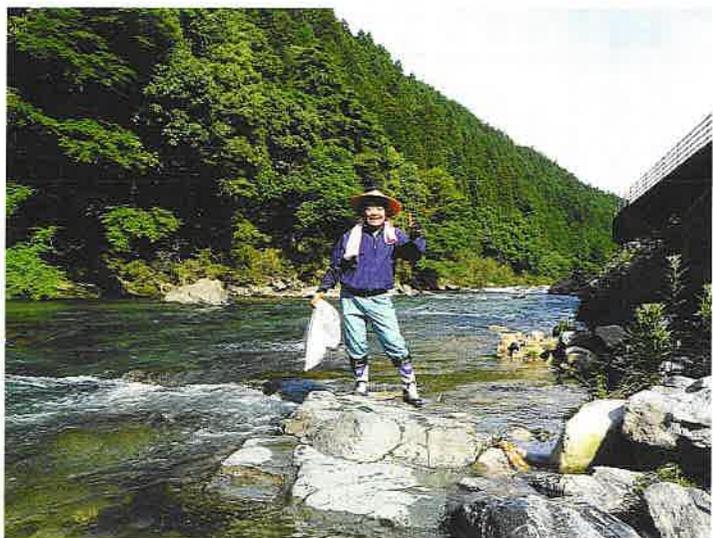
節分の時期に、白い小さな可憐な花が咲く節分草が、岩国市錦町広瀬の町外れに、広範囲で自生しています。地元の人が発見し、土地の所有者や、地元の皆さん、愛好家の皆さんが立ち上がり、「古市節分草保存会」が発足しました。専門書によると、広島県庄原市総領町が南限と書いてありました。総領町では、毎年3月の初めごろ「節分草まつり」が開催されます。保存会で研修視察に行きました。その祭りの中で、専門家の先生の講演がありました。「ここ総領町が、節分草の南限ですが、最近、新聞に出ていましたが、山口県の岩国市のどこかに自生地が発見されたそうですが、私はそんなことは無いと思います。まだ見てないので何とも言えませんが、たぶんこの節分草を買って帰って植えたか、また盗掘も多いのですがそれを植えたかじやな

いですかね」話を聞いていた私は、すかさず手を上げて「はい、山口県岩国市錦町から来ました。これがその自生地の写真です」と言っ、引き伸ばした大きな写真を皆さんにお見せしました。「おー！」歓声が上がりました。先生が「どんな場所ですか」と言われたので、「北向きの斜面で、栗林の中です。土質は石灰岩まじりの所です。地権者の話では、ずいぶん前から咲いていたようですが、ただの草だと思っていたそうです」すると先生は「それは失礼しました。間違いなく自生地だと思います。来年は私も伺いしましょう」と言ってくれました。昨年は、自生地の周りに柵を張り、猪もよく出没するところですので、電気柵も張りました。2月の初めに咲き始め、近くには駐車場もないので、今年は錦川鉄道に乗ってきたお客さんだけをご案内しましたが、なんと300人の人が一度に押し寄せました。帰りにはそのお客さんが広瀬の商店街で、食事をしたり、お土産を買ったり、商店街は大変潤ったそうです。地域活性化になりました。今年も古い枕木を譲り受け遊歩道を設置しました。草刈も定期的に行っています。汗を流し保護活動をしてくれる保存会の会員も増えていきます。

また、県内では錦川流域の宇佐川にしか生息していないという、オオサンショウウオが、



ツガニの籠に入ったり、心無い人に、やすで刺されたり、大水で下流に流されたり、巢穴が無くなり棲むところがなくなったり、高川学園の村田先生が生徒さんたちと調査に入っています。激減しているそうです。今までは地元の方は、オオサンショウウオがいたりまえ、遠い昔は食用にもしていたそうで、身近な動物でした。それが、リレーミーティングをきっかけに、保護活動が始まるようになっていきます。本年度中には「オオサンショウウ



オを守る会」が立ち上がります。2年後には、錦町で「オオサンショウウオの会全国大会」が開催されます。そのような中、地質的にも、宇佐川の河川争奪で高津川から錦川に流れが変わったというすばらしいところがあり、ジオパーク登録に向けて動き始めました。「やる気という木に、汗という水と、なにくそという肥やしをやれば、必ず花が咲く」  
ありがとうございます。

錦川流域ネット交流会 白井啓二

## 自然の楽しみ方

森林インストラクター山口会の

自然の楽しみ方

森林インストラクター山口会

事務局 橋本やまんばん順子

森林インストラクターには全国森林インストラクター会という全国組織があり、年に2、3回、日本各地で研修会を行っている。私はその研修会に毎年参加し、全国の森林インストラクターと交流しているが、その時いつも感じるのは、わが森林インストラクター山口会は特異な存在だな、ということ。

東京大阪などの都市部を除き、地方では森林インストラクターの半数以上が林業公務員やそのOBなど林業関係者で占められているが、山口会は林業関係者の方が少数派だ。そして何より女性の比率が高く（全国平均では女性の比率は2割台）、山口会を牛耳って（？）いるのはオバサンたちだ。

と、いうことは、森林インストラクターでありながら林業の指導はしたくてもできない。じゃあどうするか？林業以外に得意分野を見つけない！

しかし、樹木のことや森林生態系のこととはわかるにしても、いざ昆虫や鳥のことなどを聞かれるとお手上げだ。

そんな折、ゲッチョ先生こと盛口満氏と知り合うことができた。

ゲッチョ先生は、生き物に関してあらゆる分野に興味を持ち続けている。そういう場合はえてして「広く浅く」になりがちだが、彼の場合は「広く深く」で、それは、「著書・盛口満」の本を見ればわかる。『ドングリの謎』『骨の学校』『ゲッチョ昆虫記』『冬虫夏草の謎』等々……



そのゲッチョ先生に感化され、仲間の金丸さんは「骨」と「冬虫夏草」にハマリ、私はドングリから木の実に、そして生き物全般に……

そうやって得意分野を持つと、それを中心に次々と面白いことがみつかっていく。自然



って面白いし、楽しい、と思うようになるのに時間はかからなかった。

今、自然全体が、危機に瀕している。しかし、「自然を守ろう」と声高に言ってもなかなか人々の耳には届かない。それにはまず、私たちが、「自然って面白いし楽しいよ」ということを身をもって示さなければダメだ。

さあ、あなたの好奇心をフル稼働させて、自然を見てみませんか。そしたらきっと、自然はその面白さ、楽しさを垣間見せてくれるに違いありませんよ。

## ネイチャーゲーム

山口県ネイチャーゲーム協会

事務局長 松田義政

いくつかの活動を行いながら、樹木のある公園にやってきました。大きな木のそばに腰を降ろして、私はこんな話を始めました。「みんな、このまわりにいろんな木があるね。大きい木もあれば実がついている木や葉っぱが色づいている木もあるね。みんなの顔が一人ひとり違うように、木も一本一本みんな違うんだよ。いろんな木があるけれど、実はこの中に君の木があるんだよ。」私の話を聞きながら、すぐさま「どれ？はやく教えて！」と、一斉に振り返りました。「それじゃあ、これから君たちの木に連れて行ってあげるけど、最初は目かくしをして会いに行こう」こう言つて、一人ずつ目かくしをして、スタッフで手分けをしてそれぞれの木に連れて行きました。私は、7歳の男の子にそんなに遠くないところに立っているコナラの木を紹介することにしました。男の子をじっと見て、それから周囲の木をじっと見ているうちにそのコナラの木が、何となく彼を呼んでいるような気がしたからです。目かくしをした彼を私はゆつくりと、その木のところまで誘導しました。「さあ、あなたの木の前に来たよ。そーと両手

を伸ばしてごらん。」木肌に触れてもらいました。「ゴツゴツしているが、暖かく感じる」「両手で抱っこしてみようごらん」「おっきいなあ」その木は7歳の男の子にはやつと抱きかかえられる大きさでした。知識を言葉であたえず、彼の持つ感性で一つ一つを感じてもらいます。このようにしてしばらく木と遊んでももらいました。「さあ、それじゃあ一回戻つて、今度は目かくしをはずしてもう一度来てみようか」こう言つて、元の場所まで戻りました。「自分の木がわかるかな？」私の言葉に、男の子は自分の木の方向に向かいました。少し怪訝そうに木に触れていました。ゴツゴツで暖かい木肌に触れたり、抱っこしてみたり、ひとつひとつ感覚で確認していました。「うん、これだよ。これがぼくの木だよ」と嬉しそうに言いました。自分の木に会えた瞬間です。

これは、「わたしの木」というネイチャーゲームです。木を一つの個性を持った生命体と見ることにより、参加者と木との間に深い友情をつくりだすことをねらいとしています。

この写真は、後で母親に「わたしの木」を得意そうに紹介しているところです。この後の少年は、この公園に行く度に「わたしの木」に会いに行っているそうです。やがてそのコナラを愛おしく思うところが、その木のことを理解しようとし、自然を考える行動に

変容していきます。これは大人でも全く同じ効果が生まれます。

こんな自然の楽しみ方ができるのが、「ネイチャーゲーム」です。自然の理解と豊かな自然体験活動を通して、自然の不思議や仕組みを学び、自然と自分が一体であることに気づくことを目的としています。この少年がいずれ大人になった時、「ネイチャーゲーム」で得た自然体験が、人間形成に大きな意味を持つこととなります。



## バードウォッチング

日本野鳥の会山口県 開作秀敏

今年の夏は、連日三〇度を超える猛暑でしたが、気が付けば朝夕の爽快な空気の中に虫たちの鳴き声も聞こえてきます。秋の気配はゆつくりですが、しかし着実にやって来ているようです。

さて、この時期鳥たちの生活はどうかというと、シベリアやカムチャツカ、中国などの北国で繁殖を終えた鳥たちが、越冬のために南への渡りを始めています。海岸や河口、干潟などの水辺では、シギやチドリの間が渡りの途中に羽を休めている姿を見ることが出来ます。

シギやチドリは繁殖地と越冬地が北半球と南半球に分かれている場合が多く、数千キロから1万キロ以上飛行して渡って行くものもいます。小さな体で、地球を半周する程の距離を飛行する、そんな彼らの驚くべき行動にはいつも感心させられます。

また、この時期渡りを始める鳥は、シギやチドリだけではなくありません。皆さんもよくご存知のツバメも日本で子育てを終え、フィリピンや東南アジアの方へ旅立って行きます。ツバメは、渡りの前や渡りの途中、夜は集団でねぐらをとります。数百から数千、中には

一万羽以上の群れが日没と同時にヨシ原などに入っていく様子を見ることが出来ます。春に訪れ、秋に去って行くツバメ、私たちの生活と古くから密着し、家の繁栄や虫を食べる益鳥として大切にされてきた鳥もまた、渡り鳥の代表でもあります。

私たち日本人は、古くから季節の移り変わりを鳥の渡りによって感じてきました。ある季節が始まり、深まって行き、さらにまた次の季節がやって来る、そうした四季の変化を鳥たちは私たちに教え続けてきたと思います。鳥たちの姿を詩歌に詠み、共通の暦（カレンダー）などない時代、日本人の季節感は、春の咲く花、秋の紅葉などとならび、渡り鳥の姿や鳴き声が、季節の移り変わりを告げてくれる共通の暦（カレンダー）だったと思います。

そして、日本の自然が今よりもっと豊かで身近にあり、我々の生活がもっと自然と共生していた頃、人々は季節ごとに変わる鳥たちの行動や容姿に敏感だったと思います。鳥たちの動きがそのまま季節の移り変わりのサインだと思えますし、人々にとっては、生活や仕事の時期を知らせてくれる大切な暦だったかもしれせん。

そのように、バードウォッチングを通じて自然を楽しむことは、単に鳥を見るだけに終

わらず、季節の変化を感じとることでもあると思えます。

これから秋の渡りが本格的になります。と同時に、すぐに冬鳥たちもやって来ます。広い北の大地で人知れず繁殖していた鳥たちが、私たちの住んでいる場所へはるばる渡って来ます。彼らがどのような場所から、どのようにして辿り着いたのか、そう考えるだけで夢がふくらみ、鳥たちとの偶然の出会いに感動すら覚えます。

これからの渡りの季節、戸外にでて渡り鳥を観察してみてもどうでしょうか。四季のある素晴らしい日本の季節を、渡り鳥から感じとることがきっとできるはずです。



## 瓢たん作りについて

山瓢の会 会長 田中幹夫

瓢たんは種子の植付から収穫までに約7ヶ月間かかり、収穫後は作品の加工等で一年間常に瓢たんに関わる事が出来、瓢たん作りは栽培と加工技術の習得の二つを持つ、他の趣味とは少し違った所が有ります。

瓢たんの種類は大きく分けて、大瓢、小型瓢、長瓢、異型瓢と分別されますが、世界で作られる瓢たんの種類は38種類とも云われますが、まだまだ有るものと思われず。

大、中、小瓢とそれぞれに型の基本は有りますが、瓢たんのおもしろい所は、それぞれが基本型と違っていてもそれぞれの魅力を持つており、個々が己を主張していて、それをどう生かすかが又楽しいものです。

最近の大瓢は10数年前と比べますと格段に大きくなっており、日本古来の大瓢は大きくても胴まわり120cm位で有りましたが、現在では胴まわり168cmと云う大瓢ができる様に成りました。この瓢たんは全日本愛瓢会技術開発委員会が12年前に全日本愛瓢会名誉総裁秋篠宮文仁殿下の提案により外国(セネガル)の大瓢(円形でセネガルでは胴回り300cmに生長する)と日本の大瓢を交配して約6〜7年で日本の瓢たんの型

と成り、現在では、ほぼ日本の瓢たんの型となってきました。

私は、全日本愛瓢会の栽培研究部員でも有りますので、セネガル瓢、ナイジェリア瓢、ラオス瓢と栽培しておりますが、一般に外国の瓢たんは病害虫に非常に強いです。それに比べ、日本の瓢たんは弱く消毒作業が多く、今進められているグリーンカーテンにどうかとのお話も有りますが、難点と成ります消毒が必要で、残念ですが無理と思えます。何故



高さ 95cm、胴回り 140cm  
平成 18 年内閣総理大臣賞受賞

これまでに軟弱になって行ったか私なりに考えますと、瓢たんの歴史から見ると最初は食用として栽培され次に容器として作られ、現在は加工をして美術品と成っています。今でもラオスの方では食用として栽培されている様です。時代が変わり、食用、容器としての必要が少なく成り美術品を作る為、形の理想

を求め、色々の瓢たんの交配により軟弱な物になって行っただと思われず。今の時代の総ての事に云えるのではと思えます。

人類のそれぞれの欲から進化してきましたが、自然は崩壊して来ています。どこかで妥協、共生して行く事が



大事な事と思われず。そう云う自分は未だに欲の塊で瓢たん作りをしておりません。

私達全日本愛

瓢会は、平成23年6月2〜3日に於いて、第36回全日本愛瓢会総会及び展示会を防府市のアスピラートにて開催致します。皆様多数の御観覧をお待ち申し上げます。

## 生態系探訪

### 再話 新種ツノシマクジラの発見

つノしま自然館 小林知吉  
(豊北町自然観察指導員会会員)

#### ○梗概 新種発見

あの日からもう十二年が経過した。

一九九八年九月十一日。初秋といっても、まだ、残者は厳しかった。当時、筆者が勤務していた山口県外海水産試験場（現山口県水産研究センター外海研究部）に、「クジラが漁船と衝突、死亡し、角島の元山漁港に陸揚げされている」との情報が届いたのは、午前十時頃だった。急いでカメラと調査道具を抱えて、特牛港から連絡船「角島丸」に乗り込んだ。建設中の角島大橋を正面にしなが、船は元山漁港に向かって行った。

クジラは大勢の島民に囲まれて、漁港の船揚場にその巨体を横たえていた。体のあちこちに擦り傷がみられ、血が滲んでいた(写真①)。私は、(財)日本鯨類研究所へ資料を送るため、獣体の写真撮影と主要部位の計測を行い、DNA分析試料として、背びれ付近の肉を約二十センチ四方切り取り、調査を終了させた。肝心の種名だが、ヒゲクジラの仲間であることは判ったが、浅学の身、種の同定はできなかった。



写真①



写真②

事故から三日後、国立科学博物館の山田格博士を中心とした調査団が来島、調査の結果、ナガスクジラの子供（雌）だろうということであったが、博士はDNA分析試料として肉を持ち帰った。

その後、鯨は角島中学校前の砂浜に埋葬され、島民らによって供養されていた(写真②)。

だが、DNA分析結果は新種の可能性を導き出したのである。この驚くべき結果の信憑性を確認するために、和田志郎、山田格両博

士らは、衝突事故から半年後の一九九九年三月から同年十月に、角島に埋葬されていた鯨の骨格発掘調査を行い、詳細な研究、検討が加えられた(写真③)。



写真③ 骨格標本は現在つのしま自然館に展示してある。

結果は「新種」であった。衝突事故から五年が経過した二〇〇三年のことである。和田博士らは科学雑誌「nature」に論文を投稿し、世界にヒゲクジラの新種発見を発表した。学名 *Balaenoptera omurai*、標準和名「ツノシマクジラ」の誕生である。

### ○証言 ツノシマクジラ衝突事故

ツノシマクジラの事故死から十二年目、彼女の命日に当たる二〇一〇年九月十一日に、「新種ツノシマクジラ記念セミナー」がつのしま自然館で開催された。この中で、ツノシマクジラと衝突した明吉丸の和田宗紀船長と奥様に事故の状況を話していただいた。その主な内容は以下に記したとおりで、読者諸氏には事故の状況を想像していただきたい。なお、聞き手は筆者である。

小林 早速ですが、事故のあった九月の時期、はどのような漁をされていたのですか。

船長 棒受け網でのウルメイワシ漁ですね。

小林 早朝の事故ということは、夜間の漁を終えて帰港される時に事故に遭遇されたわけですね。

船長 そうですね。海士ヶ瀬を通過中、今で言え、角島大橋の最高部下を通り過ぎた時に起こったのです。

奥様 あの日は、近く角島大橋がコンピュータ操作で連結されるという話だったので、息子を交えた三人で橋を見上げていたんです。その瞬間、ガツンという衝撃があり、船が持ち上げられ、また下がったんです。「おとうちゃん！ 瀬を食った！」と叫びました。座礁したと思っただけです。そしたら、馬鹿言うな！と怒鳴ってやめた。毎日のように通る航路筋でそんなことはありえない。

奥様 そしたら「鯨じゃあ！」と息子が叫んだ

んです。海面を見ると大きな影が船の下に見えました。

船長 二人が鯨、鯨と叫んでいましたが、僕はイルカか何かがぶつかっただと思っておりました。

奥様 おとうちゃんは舵を握っていたから見えなかったけど、私と息子は船の後方で鯨の尾びれが大きく揺れて、沈んだのははっきり見えました。

小林 鯨は即死だったんですか。

船長 その後、鯨が本土側で浮かんでいるのを仲間の船が見つけて、元山港へ引っ張ってきたという次第です。

小林 元山港での調査終了後、鯨は土葬されました。聞くところでは、骨格発掘調査が始まるまでは、島民の方たちが供養されていたということですが。

奥様 はい、私も事故の当事者としてお参りしておりました。

小林 今思うと、島民の心情の現れとしての土葬が正解だったんですね。焼却処分だったら、骨格調査は不可能、引いては新種発見には至らなかつたと思うからです。

偶発的な事故によって私たちの目の前に現れた新種ツノシマクジラは学術的価値のみならず、自然に対する畏敬の念を私たちの胸に呼び起こしてくれました。

今後とも、角島の豊かな自然を守り続けてまいります。

お二方、本日はどうも有り難うございました。

## 共生随筆

自然を感じる楽しさを広めたい

長門市 久保田啓子

私たちは自然の中で当たり前のように生活をしていきます。でも、多くの人が日常生活の中で、自然を感じる機会は少ないように思っています。私自身がそうでした。しかし、自然を楽しんでいる友人の案内で地元を歩くうちに、近くにいなながら気づかなかったことやわからなかったことなど、新しい発見や感動をたくさんいただきました。この自然を、長門に住む人や訪れる人に紹介したい、案内したいという思いから、先日も湯本探索ツアーと称し、仲間6人で歩いてみました。

いつもは車に乗っているため、まず通ることのない道を、猛暑を避け十六時くらいから2時間かけて、「住吉神社→音信川(おとずれがわ)河川公園→大寧寺(境内散策)→大寧寺古道→高尾観音→河川散策路→俊寛塚」を回りました。歴史や文化も味わいながら、それぞれが思い思いのところで立ち止まり、息を切らせ汗を拭きながら坂道を登り、小高い山から見下ろす湯本の町並みは格別です。また、川に降りて見上げる木々や建物、そして、見あきることのない川の流れに癒され、いつも

なら通り過ぎてわからないのに、歩いて違う目線で見ると、こんなに素敵なんだと改めて感じました。最後は、温泉で汗を流し心も体もほぐされるといっておまけも付いてきます。この心地よさ楽しさを伝えるには、やはり実際に歩いて体感してもらおうしかありません。そして、その中で「自然を守る・大切にしたい」とはどういうことなのかを一緒に考えていきたいと思っています。自分で見て触れなければ、わからないからです。



そこで私は今、最近至るところで見られる道路わきの草をどうにかできないものだろうかと思っています。



## 2010年。海人受難の夏

豊北町自然観察指導員会 杉村智幸

山口県には4種類のアワビが生息しています。鮮魚店でよく見かけるのはクロアワビ(写真左)とメガイアワビで、前者はオンガイ、後者はメンガイとも呼ばれています。商業価値が高いのは、肉量、肉質に勝るクロアワビですが、採捕は容易ではありません。メガイアワビは岩の表面に見つかりますが、クロアワビは岩穴に潜んでいて発見が難しいのです。夜間になると岩穴から出て活発に動き回るため、逃げ足が速く、外敵の気配を感じると、すぐに岩穴の奥深く逃げ込んでしまいます。

アワビの旬は夏です。あちこちで素潜り漁が行われており、クロアワビの漁獲量は、海人の技量を示すバロメーターです。体力以上に知識や経験が問われるからです。例えば、巣穴の存在です。クロアワビは巣穴をもっています。巣穴を覚えていると、「次はあの崖下の割れ目、その次はあの岩の下」といった具合に、効率のよい漁ができます。巣穴に複数の個体を見つげると、採捕に手間取ります。そこで経験豊富な海人は、獲り残したアワビの殻を小突いてから、息継ぎに浮上します。危険を感じると、その場に貼りついて動かない習性を逆手に取るのです。たとえ獲り逃しても、深追いはしません。時間をおけば、巣



穴の奥から這い出してくることが多いのです。その上、数日もすれば、新参者が件の巣穴に参入していることも珍しくありません。巣穴の場所は、海人の企業秘密です。しかも、素潜り漁は、夏のある一時期、採捕するサイズを決めて行われ、海人の体力にも限界があるので、資源保護の観点からは、漁網で一網

打尽にしてしまう刺し網漁に比べ、たいへん優れた漁法といえます。素潜り漁の歴史は古く、海人の生活は単価の高いアワビをはじめ、磯にくらす魚介類との共生によって、細く長く営まれてきました。しかし、近年、資源が急速に枯渇しており、素潜り漁の存続さえ憂慮されています。採捕圧の高まり、藻場の減少などが考えられますが、とりわけ近年、地球温暖化による海水温の上昇が、生物の生態系に大きな影響を及ぼし、アワビの生育環境を攪乱しているようです。昨年のニュース番組で見たフリップには、海水温上昇に伴う磯焼け現象が日本本土のほぼ全域に蔓延している中、山口県日本海沿岸は例外とありました。それが不思議であった半面、今後もずっと例外であってほしいと願いました。それもつかの間。今年、2010年の夏は、磯焼け現象が北浦沿岸に蔓延し、カジメやアラメなどの藻場の著しい減少とムラサキウニ、ガンガゼの異常発生が目立ちました。確か20年ほど前にも、一度、磯焼けした夏があったと記憶しています。しかし、良型のクロアワビが海底のあちこちに死んで転がっている様を見たのは今年が初めてです。地球温暖化の前には、海人の知識や経験はもはや意味をなしません。日本海に育ち、にわか海人のはしくれと自認する筆者にとって、これほど寂しい夏はありませんでした。



すずめと共生について・ツイッター日記

水環境地域ネットワーク 岡谷優子

最近、ツイッターで自然や環境関連のことを発信（ツイート・つぶやき）しています。140字以内で書く短いブログみたいなものです。内容に共感した方が、リツイート（再発信）してくださったり、返信してもらったりすると、楽しいです。

例えば、スズメに関してのやりとりです。

△satehouse10さんVスズメが減っている  
と最近話題なのですが、原因の一つに最近の住宅に隙間がなくスズメの巣が掛けにくい事情があるそうです。(Sep7th)

△私Vスパモニ・・・スズメが半減?! 日本野鳥の会 安西さん  
「お庭の虫を駆除するために殺虫剤を撒くこともあると思うが、スズメが子育てをしていたら、その



時期はちよつとやめるとか場所をしぼる。一羽のスズメが皆さんの周りにいたら、そのスズメの命は虫や種が支えてきたわけです。・・・草刈りも程ほどで。(Sep14th)

△私Vスパモニ(続き) スズメが半減?! 日本野鳥の会安西さん「そうやって1羽の小鳥の背景にあるものを見ていただくと、身の回りでもいろんな命のつながりとか様々に關心を持つていただけるのでは。・・・私達の周りのただの雑草たちは虫の幼虫を育てるお家・・・なくなると虫も鳥もいつかなくなるよ。(Sep14th)

△bulgrinbulさんV 家前の歩道ぎわのエノコログサが穂を垂れています。スズメの餌場、でも時々近所の人が親切に草を引いて下さる、微妙!? 野生生物つて善くも悪くも人間の対応次第って事にも、共生の未来が見えそう。(SEP14th)

△私Vホント微妙ですね。共存、共に生きていることを感じられたら、未来が見えるのかな。(Sep14th)

△shibababoさんV スズメはもともとサバンナの鳥。草原が基本的にない日本では、人が農耕などで森を開くことで擬似的な草原が出現します。その疑似草原に依存して暮らしているのがスズメです。どうもその関係が崩れてきているのかもしれない。(Sep16th)



△私V日本のは疑似草原その維持は既に深刻な問題ですよね。里山は山に還ろうとしているし、都市部は人口公園や駐車場などで、原っぱがなくなっちゃやし・・・多難な生物ばかりですね。(Sep16th)

同じ分野に興味のある方の意見や専門的な知識も聞けるので、とても参考になっています。共感の輪が広がると思います。

## 共存から共生へ ③

用語の変遷をめぐって

### 「エコロジーの自然観」

エコロジーの考え方は、人間中心的で機械論的な自然観を批判的に捕らえ直すことから生まれたものである。その自然観を一口に言ふなら、私は自然との共生という言葉を使いたい。

共生という表現は「自然との共存」とか「人間活動と自然との調和」という以上に、自然全体の中における一員として、人間の立場を強く意識するものである。

高木仁三郎：「エコロジーの考え方」

岩波講座

転換期における人間（一九八三）より



## お知らせ

### 祝平成22年度

#### 環境保全活動功労者表彰受賞

昨年度の総会でやまぐち自然共生ネットワーク会長表彰を受賞された、周南市の伊藤芳高さんと美祢市の奥田定夫さんのお二人が、今年度、環境保全功労者として知事から表彰されることが決まりました。長年に渡る地道な活動が評価された結果です。心からお祝いを申し上げます。お二人には、10月9日(土)山口きらら博記念公園で開催されるやまぐちいきいきエコフェアの会場で二井知事から表彰状が授与されます。

今年度やまぐち自然共生ネットワーク会長表彰を受賞された、岩国市の塚本司郎さんへの記念樹の贈呈式を11月6日(土)に錦川清流線北河内駅で行います。ご都合のつく方はぜひご参加ください。

### 新規会員募集中!

9月末会員数は、個人会員114名、団体会員54団体です。今年度に入って団体では、「日本野鳥の会山口県」と「山口県ネイチャーゲーム協会」の2団体が入会されました。山口

県の豊かな自然環境を次世代に引き継ぐためには、いろいろな団体や個人が情報交換しながら連携していくことが大切です。近所やお知り合いの方に声をかけ、ネットワークの輪を広げましょう!

また、やまぐち自然共生ネットワークの趣旨に賛同してくださる賛助会員(企業)を募集しています。ぜひ声掛けをお願いします。

### 愛称募集中!

「やまぐち自然共生ネットワーク」は、山口県の豊かな自然を次世代に引き継ぐために、自然に関わる活動をしている団体及び個人がネットワークを形成し相互の情報交換や自然の保全等の活動を強化し、より一層促進するため、平成16年7月に設立され、今年で丸6年を迎えました。ネットワークの輪をさらに広げるために、呼びやす、愛称を募集します。事務局宛にどんどん意見をお寄せ下さい。お寄せいただいたご意見のなかから理事会で愛称を決定させていただきます。



## 編集後記

「今日も暑いねー」が口癖だった今年の夏、日中の気温は35度を越え、夜の気温も27度前後という日が何日続いたでしょうか。ようやく秋らしい気温になり、道ばたには彼岸花も咲き出しました。

今年度は国際生物多様性年。COP10が名古屋で開催され、「生物多様性」という言葉が新聞などにもよく出るようになりました。多様性の危機は3つの危機+温暖化と言われていますが、多様性の危機は人類存続の危機でもあることを自覚しなければと思います。執筆いただいた皆さまには心よりお礼を申し上げます。

皆様のご意見、投稿をお待ちしています。

編集担当 内田

